

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 13 日現在

機関番号：22604

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2015

課題番号：24520502

研究課題名(和文) ネイティブ不在地域で発生した新型接触言語 「アンガウル島日本語」の調査研究

研究課題名(英文) A new type of Contact Language which developed in an area with no native speakers:
Field Research on Angaur Japanese

研究代表者

Daniel Long (Long, Daniel)

首都大学東京・人文科学研究科(研究院)・教授

研究者番号：00247884

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,000,000円

研究成果の概要(和文)：この研究で旧南洋群島に当たるパラオ共和国のアンガウル島における接触言語「アンガウル日本語」の存在を指摘し、その特徴や社会的・歴史的背景、さらには接触言語学的な分類について考察した。現地調査に基づいた分析、参与観察、面接調査に加えてアンガウルを離れてコロールに移り住んでいる島民も多数調査した。調査の目的は以下の2点にあった。(1)アンガウル島民がどのような日本語を話しているか。特に戦後育ちの島民で、日本滞在経験もなく、日本語学習経験がないパラオ人が日本語を使っているか。(2)「アンガウル日本語」は言語学的にどのような言語変種(ピジン、クレオール、混合言語、中間言語、など)として分類されるか。

研究成果の概要(英文)：This research discovered the existence of a variety of Japanese spoken on the Palauan island of Angaur (Angaur Japanese, AJ) which has continued to be used and even passed down from one generation to the next in the absence of native speakers of Japanese. In the sense that it has no native speakers AJ resembles pidgin more than creole, but the population of the island all speak the same language (Palauan) so Angaur Japanese does not serve a lingua franca function like pidgins. AJ shows dramatic grammatical simplifications and lexical reductions like a pidgin, but the communicative abilities of users of the variety go well beyond what one would expect of people who had neither studied Japanese formally nor spent extended periods around native speakers. Rather Angaur Japanese is the simplified Japanese acquired by the postwar generation from their bilingual parents. Because of the similarities with the creole-creoloid dichotomy, we propose the name "pidginoid" for this variety.

研究分野：社会言語学

キーワード：言語接触 接触言語 自然習得 残存日本語 日本語のディアスポラ pidginoid 準ピジン ピジノイ
下

1. 研究開始当初の背景

アンガウル島はパラオ共和国に属する離島であるが地理的に隔離されており、他州の状況とは異なる。パラオの中心はコロール島とその北にあるバベルダオブ島であり、現在この二つは橋で結ばれているため交通が容易である。その他の有人島もほとんど一つの巨大なリーフ(周囲 298 キロの珊瑚礁)に囲まれているため、海が穏やかで行き来が容易である。一方、アンガウル島はこの巨大なリーフの外側にあるので、外海に出なければならず、悪天候で定期船が欠航になることがしばしばある。海が荒れていなくも、コロールから 64 キロ離れているため、アンガウル州政府が運営している定期船(月に 5 回のフェリー)で 3.5 時間かかる。つまり、アンガウル島はパラオに属しながらもかなり孤立しているのである。そうした地理的背景から、パラオのその他の島とは異なる歴史と社会状況が見られる。さらに以下で説明するように、戦後に日本人が居住していたパラオ唯一の州でもあった。

20 世紀の間は、アンガウル島は絶えず、多言語社会であり続けたと言える。ドイツ時代からヤップのウルシー環礁やそれぞれの離島から男性が労働力として強制移住させられ、家族の女性も連れて行かれた。日本時代にもヤップ人が労働者として住んでいたことが分かっており、またサイパンの人々がアンガウル島で生活していたため、彼らが暮らしていた地域は地図に「サイパン村」と記されている。さらに、日本がパラオを統治し始めた 1914 年から日本軍が配置されていたが、その後日本人の入植者が増加し、1932 年の統計によると、アンガウル島の住民 975 人のうち、日本人は約 3 分の 1 弱を占めていた。戦前・戦後ともにアンガウル島では、日本人との会話のみならず、パラオ語を母語としない者同士の共通言語(リングフランカ)として日本語が用いられていた。

第 2 次世界大戦が終結するとともに日本人は島から帰還することを余儀なくされたが、燐鉱石の採掘のために 1946 年 5 月に再び居住し始めた。1946 年 7 月に 150 人の労働者が到着し、その後 9 月、10 月にそれぞれ 170 人の労働者が到着した。つまり、最終的にアンガウル島に居住する日本人は 500 人まで増加した。移住初期は、日本人は燐鉱会社の敷地内にある寮に居住し、外に出ることが制限されており、アンガウル島民の女性もまた寮に出入りすることを禁止されていた。寮での食事は限られているため、寮の外に出て他人の家の作物を盗み食ったことが理由だった。しかし、時が経つにつれてそのような制限が緩くなったようである。人口密度が比較的高かった当時の状況で(150 人/km²)、交流は自然に増えていった。アンガウル島内のアンガウル州資料館には、日本人とパラオ人の当時の交流の様子の写真が展示されている。このようにパラオのその他の島とは異なり、戦後直後も日本人が居住していたアンガウル島では、日本語の使用頻度が高かったことが容易に想像できる。1956 年までアンガウル島に住んでいた Toshiwo Akitaya によると日本人の燐鉱石事業が 1955 年まで続いた。

2. 研究の目的

本研究では、旧南洋群島であるパラオ共和国アンガウル島における接触言語「アンガウル日本語」(AJ)の存在を指摘し、その特徴や社会的・歴史的背景、さらには接触言語学的な分類について考察する。パラオは、戦前に日本語による教育が行われていたため、老年層に流暢な日本語話者が存在する。こうした残存日本語は他の地域でも研究がなされており、また旧植民地におけるクレオール化の研究も進んでいる。筆者らはパラオにおいて残存日本語の調査を行っており、調査の過程で、パラオの離島であるアンガウル島では戦前世代だけでなく、戦後世代でも日本語が

話せるという情報を得た。科学的なデータやはっきりした基準があったわけではなく、あくまでも印象に基づいた非専門家の「話せる」という評価であったが、複数の住民から証言を得た。そこで、日本語話者数の誇張やその日本語能力の過剰評価があったとしても、そもそも「アンガウル島民は日本語が話せる」という評判の発端はどこにあるか調べる必要があると考え調査に至った。

現地調査に基づいた分析、参与観察、面接調査に加えてアンガウルを離れてコロールに移り住んでいる島民も多数調査した。調査の目的は以下の2点にあった。(1)アンガウル島民がどのような日本語を話しているか。特に戦後育ちの島民で、日本滞在経験もなく、日本語学習経験がないパラオ人が日本語を使っているか。(2)そうした「アンガウル日本語」は言語学的にどのような言語変種(ピジン、クレオール、混合言語、中間言語、など)として分類されるか。

3. 研究の方法

本研究ではパラオ国のアンガウルに渡り、そこで参与観察および面接調査を行なった。それに加えてアンガウルを離れてコロールに移り住んでいる島民も同様な方法によって多数調査した。

4. 研究成果

アンガウルにはこれまで研究されてきたような接触言語変種(ピジン、クレオール、準クレオール、コイナー、混合言語など)とは大きく異なる接触言語が使われていることが分かった。アンガウルで使われている日本語の分類として「準ピジン」(pidginoid)という新たな分類を提唱した。

以下では、AJの使用者が日本語を習得した状況が他の接触変種(中間言語、ピジン、クレオールなど)の状況とどう違うかを論じる。ここでは、その言語が母語となっているか

(表内)、その言語が母語話者環境で習得されているか(表内)、教室学習があるか(表内)の点から考える。

まずAJはピジンとの共通点もあるが、重要な違いもある。19世紀の横浜など開港場で使われていたいわゆる横浜ピジンと比べてみよう(表)。両方ともに母語とはなっておらず、使用する話者にとって第二言語に当たる。両方は教室で覚えたものではなく、自然習得によるものである。相違点は、それぞれの言語が話されている地域に上層言語の母語話者がいたかどうかである。19世紀の横浜ピジンの場合、上層言語に当たる日本語を母語とする人はもちろんいた。一方、現在の中年層AJの使用者が日本語を習得した時代は日本人が島からいなくなっていた。この点、AJはピジンと大きく異なるのである。

なお、表で現していない違いもある。表のプラスとマイナスは基本的に取り上げている接触言語を区別するために必要最低限の要因である。横浜ピジンの場合、英語(基層言語)と中国語(基層言語)を母語とする人がいたが、彼ら同士が話すときに日本語を使っていた。典型的なピジンの場合は、こうした基層言語話者同士による「第三者使用」

(tertiary usage)が見られる。しかし、戦後日本人がいた時期(1950年代)はパラオ人と日本人の2グループで「第三者使用」の状況は限られていた。1960年からパラオ人のみになったため、さらにこの状況から遠のいていったのである。

ピジン以外の類の接触変種(中間言語、クレオールなど)とAJはどう異なるだろうか。

まず、JFL環境の学習者が話す日本語は、教科書などを用いた教室(個人)学習が中心になっていることが一般的である(表)。また、JSL環境の学習者は必ずしも教室学習をするわけではないが、母語話者環境にいるという点が大きな違いである(表)。AJとクレオール(宜蘭クレオールなど)との違いは、

大きくそれが母語になっているかである(表)最後に準クレオール(creoloid)との違いだが、実はこれまでの言語接触論では「準クレオール」という用語を使って二つのかなり違う現象が語られることがあった。そのため本研究では準クレオールを「アフリカーンス語型」と「シンガポール英語型」の二種類に分けて考察する(表 と)。アフリカーンス型準クレオールはクレオールと同じく母語化しているため、AJとは異なる。さて、表だけを考えれば、 はAJと同じ「-」「-」「-」になっている。しかし、二つの言語変種の違いは、言語能力の高さにある。シングリッシュは(主流英語との相互理解の問題はともかくとして)社会生活の中でかなりのコミュニケーションが可能な高度な変種である。一方、AJはコミュニケーション手段として利用価値が低く、非常に制限された言語変種であると言える。

表 アンガウル日本語と接触言語変種の比較

	母語	母語話者環境	教室学習
アンガウル日本語(準ピジン)	-	-	-
ネイティブ日本語	+	+	+
横浜ピジン	-	+	-
JFL 中間言語	-	-	+
JSL 中間言語	-	+	±
クレオール	+	-	-
アフリカーンス語(Afrikaans)型(母語話者型)準クレオール	+	-	+
シンガポール英語(Singlish)型(非母語話者型)準クレオール	-	-	-

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 3件)

ダニエル・ロング、今村圭介(2015.03)「日本語が公用語として定められている世界唯一の憲法 パラオ共和国アンガウル州憲法」『人文学報』査読無 503: 85-101 首都大学東京

ダニエル・ロング、斎藤敬太、Masaharu Tmodrang(2015.03)「パラオ語で使われている日本語起源借用語」『人文学報』査読無 503: 61-84 首都大学東京

斎藤敬太、磯野英治(2016.06 掲載決定)「パラオ人の日本語に見られる談話の特徴 ターン交替時の発話を中心に」『日本語学研究』査読有 48 輯: ページ未定 韓国日本語学会

[学会発表](計 3件)

ダニエル・ロング(2013.05.11)「ネイティブ不在地域で発生した新型接触言語 パラオ国アンガウル島からの報告」第150回変異理論研究会、奈良大学(奈良県奈良市)

斎藤敬太(2014.07.09)「非母語話者の日本語にみられる『埋め合わせ方略』パラオ、伊賀上野・大泉を比較して」公開シンポジウム「旧南洋庁地域パラオの日本語からアジア・太平洋の日本語教育を考える」University of Technology Sydney シドニー市(オーストラリア)

斎藤敬太(2014.07.11)「パラオの残存日本語話者のコミュニケーション・ストラテジー」シドニー日本語教育国際研究大会2014 ポスター発表(査読有)University of Technology シドニー市(オーストラリア)

[図書](計 0件)

〔産業財産権〕

○出願状況（計 0 件）

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

出願年月日：

国内外の別：

○取得状況（計 0 件）

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

取得年月日：

国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6．研究組織

(1) 研究代表者

ダニエル ロング (Long Daniel)

首都大学東京・人文科学研究科・教授

研究者番号：24520502

(2) 研究分担者

小西 潤子 (Konishi Junko)

沖縄県立芸術大学・音楽学部・教授

研究者番号：70332690

今村 圭介 (Imamura Keisuke)

長崎大学・多文化社会学部・戦略職員

研究者番号：00732679

(3) 連携研究者

(4) 研究協力者

斎藤 敬太 (Saito Keita)

研究者番号：なし

首都大学東京・人文科学研究科・博士後期課程 2 年